

平成 30 年 6 月 15 日現在

機関番号：35307

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K16763

研究課題名(和文) 統語構造変化における歴史的・地理的バリエーション研究 キリ・ギリを資料として

研究課題名(英文) The variety of constructional shifts from the diachronic and geographical point of view: Focusing on the formal nouns "Giri/Kiri"

研究代表者

岩田 美穂 (iwata, miho)

就実大学・人文科学部・講師

研究者番号：20734073

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円

研究成果の概要(和文)：日本語史には形式名詞が文法化して文法要素となる構文変化がいくつか指摘されている。本研究では、その種の構文変化における多様性を歴史的・地理的観点から明らかにした。具体的には、名詞ギリ・ギリを共通の由来とする文法形式として、中央語における副詞節を形成するギリ、鹿児島県甑島方言に見られる条件形式ギー、愛媛県東予方言における限定の副助詞ギリを取りあげ記述分析し、変化の過程を考察した。その結果、これらはある一定の段階までの変化は共通するが、最終的な文法化の度合いは三地域でそれぞれ異なることを指摘した。

研究成果の概要(英文)：In the history of Japanese language, some constructional shifts such as the grammaticalization of formal nouns have been pointed out. This study demonstrated the variety of that kind of constructional shifts from the diachronic and geographical point of view. We focused on three grammatical constituents commonly deriving from the formal nouns "Giri/Kiri". We investigated first "Giri" in 18-19th Kamigata dialect and modern standard Japanese which constitutes an adverbial phrase, secondly "Gii" in Sato dialect (Koshiki Island, Kagoshima Prefecture) which constitutes a conditional clause, and thirdly "Giri" in Ehime Prefecture Toyo dialect which constitutes a determinative sub-particle. We described these grammatical constituents and examined the process of their constructional shifts. As the result, this study pointed out that, while these formal nouns had grammatically changed in a common way until a certain definite stage, the degree of grammaticalization is various in each area.

研究分野：日本語学

キーワード：形式名詞 文法化 日本語史 九州方言 愛媛方言 ギリ

1. 研究開始当初の背景

本研究は、日本語の統語構造の変化における一般性を古典語および現代共通語（総称して中央語と呼ぶ）と方言の複合的な観点から追求していくものである。

中央語を中心とした構造変化の考察は、資料上の制約から、ある要素が最終的にどの段階まで主節に入るか、あるいは主節から出るかといった単方向かつ一線の変化しか見えない場合が多い。しかしながら、言語変化の持つ本来的な多様性を考慮するならば、同じ要素であっても、ある場合には主節から完全に独立した節を形成する要素になり、ある場合には主節から完全には独立しない副詞節の段階にとどまる、などのような段階性があったりもよい。

このような背景のもと、日本語史研究においては近年、小林隆（2003）『方言学的日本語史の方法』（ひつじ書房）、宮地朝子（2007）『日本語助詞シカに関わる構文構造的研究』（ひつじ書房）などをはじめ、地理的変異や多様性と歴史研究を有効に結び付けようとする研究が盛んになってきている。また、方言学分野においても、方言形成の観点から言語変化のプロセスと地理的分布を関連づけ、重層的に変化（あるいは地理的分布）を捉えようとする試みがなされている（日高水穂（2013）「複合辞「という」の文法化の地域差」（『形式語研究論集』和泉書院）など）。日本語史研究は、「中央語の歴史」という一言語の記述・分析に留まるだけでなく、日本語の様々なバリエーション（現代標準語を含む）を視野に入れながら、より多層的に変化の記述を行っていくことが今後ますます求められていくであろう。そしてそれは、言語変化の個別性と普遍性を明らかにすることに繋がり、一般言語学にも貢献するものとなる。

本研究では、そのような日本語史の動向をふまえ、中央語だけでなく、地理的分布とその成立背景を考察することによって、一つの言語形式が文法化していく過程をより重層的に捉えようとする試みである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、日本語の統語構造変化における多様性を、歴史的・地理的観点から明らかにすることである。具体的には、形式名詞の文法化に注目し、形式名詞が主節内の名詞句から述語句や従属節などさまざまな他の構成要素へと変化していく過程について考察する。一つの形式名詞が複数の地域で異なった発達を遂げたと思われる「ギリ・キリ」（以下、ギリに統一）を取りあげ、それらが一つの大きな変化の方向性を軸とし共有しながらも、最終的にどういった文法要素になるのか、という「着地点」にさまざまな段階がある、ということを実証することを目指す。

本研究では、特に形式名詞「ギリ・キリ」の文法化に着目し、それを由来とすると思われる、中央語におけるギリ（キリ）の歴史変化、鹿児島県薩摩川内市甕島里方言（以下、里方言）における条件形式ギーの記述、愛媛県東予方言（以下東予方言）における限定の副助詞ギリの3つについて変化の背景を考察する。特に、里方言の条件形式ギーおよび東予方言の副助詞ギリの記述を詳細に行う。

一つの形式を由来とするこれらの方言をふまえ、その成立背景を考察することによって、「中央語の歴史」という単一線だけではない、より重層的な変化の把握ができると考える。

3. 研究の方法

構造変化の多様性を実証的に示すため、本研究では、各地に点在する形式名詞ギリ由来の形式を取りあげる。具体的には、中央語におけるギリ、里方言における条件形式ギー、東予方言における限定の副助詞ギリの3つを扱う。これらはいずれも際限を意味する名詞「キリ・ギリ」からの派生と言われており、その変化は「遠心的変化」と考えられるが、地域によって、副助詞から接続助詞までさまざまな文法要素として用いられている。本研究では、まずそれぞれの地域における現在のギリの使用について、構文的・形態的観点から考察を行い、その特徴について記述していく。

（1）中央語におけるギリの歴史的变化

中央語の変化については、宮地朝子（2011）「名詞キリの形式化と文法化」（『日本語文法の歴史と変化』ひつじ書房）を参考にしながら、まず18～19世紀上方語におけるギリの様相を明らかにする。資料として近松浄瑠璃集、井原西鶴集、前期咄本、後期資料として洒落本、後期咄本を用いる。

（2）里方言における条件形式ギーの記述と分析

九州西北部に分布する方言特有の条件形式ギーについて、その成立の背景を考察する。そのために形式名詞由来のギーがどのような過程を経て条件形式となったのか、後者として、ギーが条件表現として参入していく前の条件表現体系はどのようなものであったのか、をそれぞれ問題とする。

については(a)鹿児島県薩摩川内市甕島里方言を中心とする臨地調査データ、及び『方言文法全国地図』を用い、条件形式としてのギーのもつ特徴を、用法の分布および異形態の種類等の観点から考察する。(b)中央語における形式名詞ギリの文法化に注目し、その過程の中で条件形式への発達が可能かどうかを検討する。については近世末期佐賀方言が多数みられる蒲原大蔵作の滑稽本類（1830～1857年）案間坊暮成作『一寸見た夢物語』

(1867年)を資料とし、近世末期の佐賀方言における条件表現体系を整理する。

(3) 東予方言における副助詞ギリの記述と分析

東予方言におけるギリは限定の副助詞であるダケに類すると言われるがその詳細な用法は明らかではない。まず用法を明らかにするために20代~70代男女を対象とした面接調査および方言談話資料等による文献調査を行う。用法を明らかにした上で東予方言におけるギリがどのようなプロセスを経て現在に至るかを考察する。

4. 研究成果

(1) 中央語におけるギリの歴史的变化

18世紀上方語では、ギリは形式化した名詞句として用いられる(宮地(2011))が、その使用には偏りがあり、助詞ニを伴った副詞句として用いられるか、コピュラを伴った述語句として用いられるか、の2つに大別できる。特に前接に「明日」のような時間名詞を伴った名詞句を形成する率が約67%を占める。後接助詞は、ニを伴う率が最も高く約50%弱を占める。結果、「明日ギリに」といった時間名詞が前接、助詞ニが後接する例がギリの使用の中では最も多く約33%を占める。これらはいずれも時間副詞句として機能している。19世紀にはいると、上方語ではギリの使用が激減するが、構文的な傾向は18世紀の状態と同様である。

(2) 里方言における条件形式ギーの記述と分析

(a)ギーの用法は予測(総称)反事実的条件文の用法が最も広く分布しており、認識、事実的条件文は地域差がある。さらに、里方言では、認識、事実においてギーの衰退が著しい。よって、現代におけるギーの用法は予測・反事実的条件文を中心とすると言える。次に、ギーの異形態は「ギー」「ギー+ニ/ワ/ニワ」「ギー+ト」の大きく3系統に分けられ、中でも「ギー+ニ/ワ/ニワ」形が最も広範囲に分布している。以上のようなギーの特徴は、共通語における「場合・時に/には」等の周辺の条件表現形式に類似している。ギーはこのような「形式名詞+ニ」で時間副詞句として用いられる用法から発達したと推測した。(b)(1)の結果をふまえると、18世紀上方語ではギリの用例の約半数が助詞ニを伴った時間副詞句として機能している。この結果は、先の推測と矛盾しない。しかしながら、18世紀上方語におけるギリは期間限定の時間副詞句であり、共通語で条件表現形式化している時間副詞句はいずれも時期限定である。よって、更にギリ自体の意味が期間を表すものから時期(特定の時)を表すものへと変化する必要があるが、この点はまだ十分に裏付けができておらず今後の

課題である。

：近世末期佐賀方言では、すべての用法でレバが用いられており、その下位形式としてナレバがある。中央語のようなタラ・ナラもわずかに観察されるが、佐賀方言においては、これらの形式の分化が進まず、レバが広く条件表現を担う体系が近世末期まで続いていたことがわかる。ギーは1例のみ観察され、ギーの条件形式としての成立は近世末期頃と推定される。現代佐賀方言においてギーもほぼすべての用法を担うことができることから、当該地域において条件表現は形式を分化させる方向ではなく、特定の形式を用いその形式が交代していくという変化の方向であったと考えられる。今後更に時代語との詳細な調査、近隣県との体系の比較等をする必要がある。

(3) 東予方言における副助詞ギリの記述と分析

東予方言における副助詞ギリの特徴をまとめると、以下ようになる。

○名詞、及び動詞、形容詞終止形に接続可能。
○名詞句として主節動詞と格関係を持つ位置で用いられる。主節動詞の項となる場合、無助詞となり、格助詞を後接させることは不可能ではないが、不自然である。その他の意味格は、基本的には助詞を後接させるが、「デ」などは前接させることも可能である。
○名詞句としてコピュラを伴い述語句の位置で用いられる。

○「(いつも)太郎バカリが得をする」「あなたのことバカリ話す」「毎日雨バカリ降る」のような標準語において「バカリ」で表される事態の限定には問題なく使える(「(いつも)太郎ギリ得する」「お前のごとギリ話よる」「毎日雨ギリ降る」)。一方、「(その秘密は)太郎だけが知っている」「机だけを持ってきてくれ」のような事物の限定を表す場合、使用が不可能ではないが、事態の限定に比べると非常に用いにくい(「??太郎ギリ知るとる」「??机ギリ持ってきてくれ」)。

以上のことから、東予方言におけるギリは、基本的に名詞句を取り立てる副助詞ではなく、事態(文)を取り立てる副助詞である、と結論づけることができる。この特徴と(1)の中央語におけるギリをふまえて考えると、東予方言におけるギリは、中央語において述語句の位置で用いられていたギリのような用法から変化したものと推定される。

(4) 形式名詞ギリの文法化

以上、(1)~(3)の結果をまとめると、ギリの変化は、その初期段階として18~19世紀の中央語に見られたような時間副詞句用法と述語句用法のいずれか(あるいは両方)を持つ、ということが考えられる。里方言においても、東予方言においても、この段階は中央語と共通していたもの推定される。そして、前者の位置で文法化した結果が里方

言に見られるような条件形式として用いられるギーであり、後者の位置で文法化したものが東予方言に見られるような副助詞ギリであると考えるのが妥当である。中央語では初期段階までは文法化が進んだものの、それ以上は発達せず、衰退した。

ギリの構造変化は基本的には文中から外に向かっていく遠心的変化であるという点で共通の方向性を持つが、一方でどの位置でどのように文法化していくか、は地域によって異なり、多様である。本研究の目的である重層的变化の実証は果たされたと考える。しかしながら、今回は西日本を中心としており、東日本、特に標準語におけるキリの位置づけができていないという問題が残る。変化の多層性を説明するには更に再検討とケースの補強が必要である。また、今回はギリという一つの形式名詞に注目したのみであったが、他の形式名詞の文法化とその地理的変異についての研究をふまえ、更に大きな視点での位置づけをしていかなければならない。

成果発表については、(1)(2)は予定通りに成果を発表できたが、(3)および総括としての(4)については期間内に成果発表することができなかった。2018年度中に学会発表および論文化をする予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

岩田美穂「近世末期佐賀方言資料にみられる条件表現」12、pp.80(1)-63(18)、査読無、2018年1月

〔学会発表〕(計4件)

岩田美穂「条件表現形式ギーの成立背景についての考察 甕島里方言を中心に」、土曜ことばの会、大阪大学、審査無、2017年7月

岩田美穂「条件表現形式ギーの成立背景についての考察 甕島里方言を中心に」、第271回筑紫日本語研究会、九州地区国立大学九重共同研修所、審査無、2017年8月

有田節子・岩田美穂・江口正・前田桂子「方言条件形式の多様性 九州方言を中心に」、日本語学会2017年度秋季大会、金沢大学、審査有、2017年11月

岩田美穂「条件表現形式ギーの成立背景についての考察」、日本語文法学会第18回大会、筑波大学、審査有、2017年12月

〔図書〕

なし

〔その他〕

ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

岩田 美穂 (IWATA Miho)

就実大学・人文科学部・講師

研究者番号：20734073

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし